

計画・交通研究会

Association for Planning and Transportation Studies

会報 2009-7

発行日：平成21年7月00日

発行元：計画・交通研究会

目次

Opinion	1
都市モデル研究の現状と今後	
News Letters	2-7
事業報告・活動報告	
Backyard	8
事務局通信	

□ Opinion 都市モデル研究の現状と今後 山梨大学 武藤慎一

昨年度（2008年度）、計画交通研究会において「都市モデル研究会」を開催させて頂いた。本稿では、当研究会の報告とともに、都市モデル研究の現状と今後の展望について述べたい。

「都市モデル」とは、都市における諸問題に対する解決策を見出すための分析モデルの総称である。旧くは「土地利用・交通モデル」が、都市交通整備の土地利用に与える影響の分析、あるいは土地利用規制等の都市政策が交通を介して生じる影響や効果の分析を行うため発展し、計画分野において多大な貢献を果たしてきた。都市モデル研究の一部は、そうした土地利用・交通モデルを、理論的あるいは実証的に発展させた延長に位置づけられる。また、都市分析に係わるデータ蓄積が量的にも質的にも進んできたことから、精緻な統計的手法を用いた研究の進展も見られる。さらに、情報技術の進展によって、都市計画決定の際の住民説明等において利用が期待できるCG（コンピュータグラフィック）を用いた研究なども進んでいる。以下、それぞれの研究について、都市モデル研究会での報告を基に簡単に紹介する。

1) 土地利用・交通モデルの発展としての都市モデル研究

土地利用・交通モデルの発展として位置づけられる都市モデル研究は、大きくは応用都市経済（Computable Urban Economic：CUE）モデルと、マイクロシミュレーションモデルに基づく研究がある。前者は、土地利用・交通モデルに経済理論的基礎を付加することにより、便益評価に適用できるようにしたものである。

特に、便益の地域への帰着分布を把握できる点は今後の交通整備、都市政策の是非を判断する上で重要な情報となると期待できる。一方、マイクロシミュレーションモデルは、人々の行動を非常に詳細にモデル化することで、より細やかな政策に対する分析を行おうとするものである。これらは、現在までにデータが蓄積されてきたことや、データ収集技術の進展により独自に調査したデータの利用も可能になったことにより最近急速に研究が進んでいる。

2) 都市におけるデータを用いた統計分析

都市におけるデータが近年、量的にも質的にもかなり蓄積されてきた。例えば、過去の土地利用データなどはこれまであまり整備されてこなかったが、それらがデジタルデータとして整備されてきている。そして、そうしたデータを用いれば、これまでの都市域の変遷が一目瞭然となる。しかし、一部のデータは入手困難な場合があり、これに対し、統計的分析を活用することで欠損データを補完する研究が進められてきたのである。

3) 都市計画策定における住民説明の場での都市モデル研究の活用

現在は、都市計画策定段階での住民説明も非常に重要となっている。こうした場において、CG（コンピュータグラフィック）を利用した視覚的観点からの情報提供は、住民理解を進める上でも大変重要と考えられる。情報技術の進展によりCG利用が現実のものとなってきたが、それを実際にどう活用するのか、こうした研究が進められているのである。

以上が都市モデル研究会の報告である。続いて、こうした研究の今後の発展についてまとめておきたい。一つの方向は、こうした研究の相互連携を深めていく、すなわち都市モデル研究の総合化を考える必要がある。研究は一つの分野を深化させていくこともある時点では重要であるが、その後はやはり多の研究との連携を深めていくことが重要となる。同じ都市を研究対象としているのであるから、次の段階として都

市モデル研究の総合化を図っていきたい。また、都市モデル研究分野だけでなく、交通分野など他の分野との連携も必要となろう。交通配分に関する研究などはますます精緻化されており、そうした交通分野と矛盾無く一貫したモデル分析が可能であるかは、都市モデルの必須要件になると考えられる。以上、まだ残された課題も多いが、都市モデル研究のますますの発展を期待して頂きたい。

(山梨大学 社会システム工学系 准教授)

□ News Letters

事業報告・活動報告 □

■貴重な資料の公開

『観光立国』を標榜して―「東京都観光講座講義集」(発行：昭和24～28年)

第二次世界大戦後の昭和23年から27年まで、5回にわたって東京都主催の観光講座が開かれました。「・・・観光事業による外貨の獲得を以て唯一の途とせざるを得ない。・・・政治的、経済的、文化的角度から、真剣に注目されねばならないのである。・・・」(第一回の序より)として、当時の産・官・学はもとより言論・文芸のリーダーたちが講師となり、数日間連続(第一回、二回は6日間)して真剣に学ぶ研修会でした。東京都だけでなく我が国全体の観光振興の指針が示されており、現在の我が国並びに東アジア諸国の観光にとって、学ぶべき点が多い貴重な観光講座です。

この観光講座の報告書は8冊の講義集(講義録)として発行されており、「当て塾」で全巻の複製(A5版、約1,100ページ、4分冊)を作成しました。計画・交通研究会にも閲覧用に1組を置きましたので、多くの方々にご覧頂きたいと思います。

□「観光講座講義集」(複製)の内容

第1冊：「観光の理論と実際」(第一回観光講座全集)(310pp.、1949.3)

第2冊：「観光読本際」(第二回観光講座講義集)(252pp.、1949.10)

第3冊：「観光叢書」(第三回観光講座／一・

二・三集)(236pp.、1950.11～51.5)

第4冊：「観光叢書」(第四・五回観光講座／四・五・六集)(312pp.、1951.9～53.3)

□問い合わせ先：「当て塾」事務局(野倉淳)

Tel.03-5974-0575

E-mail:atejuku@nifty.com

■2009年5月 計交研・当て塾共催セミナー (第Ⅸ講・第3回)

●日時：平成21年5月13日(水)

17:00～20:00

●場所：計画・交通研究会会議室

●講師・演題

①「当て塾」塾長 鈴木忠義 先生

観光原論研究(14) II. 観光の意味論(つづき)

②旅と観光研究室 溝口周道 氏

交通の発達と近代ツーリズムの黎明

●参加者：17名(うち計交研関係6名)

〔講義概要〕

◆観光原論研究・14◆(鈴木忠義)

II. 観光の意味論 3. 第三主体にとって

3.1 第三主体とは

観光に関わる第三の主体には、主として公共的な性格を持つ施設等(観光基盤)を担う主体、主として民間の経営的部門(観光産業)を担う主体、及びこれらの中間的役割を担う主体がある。

①観光事業(公共的施設等を担う主体)

②①と③の中間的役割を担う主体

③ 観光企業（民間経営的部門を担う主体）

3.2 観光産業

観光産業に関連する要素は、「観光の学と術の体系〈中分類表〉」（鈴木忠義、2003.6.16）の中の以下の分類で示される。

5. 観光対象と活動（50～59）
6. 観光手段施設（60～69）
7. 観光政策（70～79）
8. 観光経済（80～89）
9. 観光経営（90～99）
0. 総記（00～09）

3.3 専観光と兼観光

(1) 観光の概念に左右される

専観光と兼観光という言葉があるが、これは観光（あるいは非観光）の占める比率の問題である。第三主体について専観光と言う場合は観光の比率が高いという意味であり、観光の比率が100%という厳密な意味での専観光は殆どない。観光旅館をビジネス客が利用することもある。

観光道路、観光ホテルなどは、設立の動機付け（モチベーション）で観光利用を重視した呼び方である。このため、観光利用だけの施設と思われることもあるが、観光以外でも利用される。一方、動物園、美術館などはその目的による呼び方で、観光者の利用が多くても“観光動物園”などとは呼ばない。

このように、名称や呼び方などは観光との関連を正確に表していないため、観光の比率で判断することが重要である。

(2) 旅行業でも、個人も

旅行業は、観光旅行が主であるが、公務・業務・研修・視察・調査等の旅行も扱う。

個人が観光産業に従事する形態は、専業もあれば、パートやアルバイトなどの兼業もある。また、観光地の住民が、無報酬で観光ガイドや観光ボランティアなどを行うこともある。こうした住民の活動は、観光地に対する認識の高さを示し、観光地の品格ともなる。

◆報告（フォーラム当て2009）・1◆（溝口周道）
交通の発達と近代ツーリズムの黎明～イギリス：トマス・クックの時代へ（大衆観光と旅行業）～
近代以前の主な交通手段は船と馬車であり、

古代ローマの時代から観光の交通手段としても用いられたが、特権階級や富裕層など利用者層は限られていた。近代に入り産業革命の進展と相まって、水運や馬車交通が発展し輸送量は増加したが、それでも利用者は限定的であった。

鉄道が登場し普及することにより大量輸送が可能となった。トマス・クック（1808－1892）は、社会の変化と大衆のニーズを捉え、旅行が人々にもたらす効果を認識し、旅行業者として様々な工夫とサービスを提供し、旅行を大衆に解放した。

〔報告目次〕

1. 観光の交通手段としての船と馬車
2. 水運の発達（運河）
3. 郵便馬車の登場と馬車交通の発達
4. 鉄道の登場とトマス・クックの旅行業

（文責：「当て塾」事務局 野倉 淳）

■2009年5月 計交研・当て塾共催セミナー （第Ⅸ講・第4回）

●日時：平成21年5月27日（水）

17:00～20:00

●場所：計画・交通研究会会議室

●講師・演題

①「当て塾」塾長 鈴木忠義 先生

観光原論研究（15）Ⅲ．観光の基礎理論（1）

②（財）日本交通公社 研究員 小池利佳 氏

報告：足利市観光まちづくりシンポジウム

●参加者：19名（うち計交研関係7名）

〔講義概要〕

◆観光原論研究・15◆（鈴木忠義）

Ⅲ．観光の基礎理論

1. 観光の（命題）条件

「命題」とは、数学・論理学などの用語であるが、観光にも命題（または原理、公理等）に類したのがあると考えられる。これらは、“原論の中の原論”となるものかも知れない。

例えば、「観光の資源性の基礎は自然・歴史・文化」と言いたい。その実例は、京都である。京都が我が国を代表する観光都市であるのは、観光のために造られたからではなく、自然の大舞台を上手く利用して、その中で歴史を蓄

積し文化（生き様）を育ててきたからである。このように、自然・歴史・文化が観光資源の基礎を成すことが基本と考える。

しかしながら、観光は社会現象であり「ゼロ・1」では判断できないことが多い。このため、自然現象の命題のように明快な証明ができない。命題と呼ぶことは無理かも知れないので、何か適切な言葉を探したい。

以上のように、「観光の命題」については明確な提示が困難であるため、本項では命題への取り組みとして、以下のような観光に関する各種の条件（抵抗）を整理したい。

(1) 観光現象の抵抗

観光は条件が複雑であり、観光行動が出現するときには、様々な抵抗がある。

○時間抵抗（到達時間）

文明により変化、観光事業者の工夫

○費用（料金）抵抗

大量・大衆化による低廉化

○接遇抵抗（ハード、ソフト）

利用施設から人的サービスまで

○経過（経験）、間、なじみ、馴れ

リピーターをどれだけ確保するか。

○密度（混雑）抵抗

混雑・空いている・・・両方が求められる。

(2) 選択条件

個人差ではなく社会集団としての選択条件として捉える。（社会心理学）

好み、嗜好、趣味／回遊指向／能力（ソフト）／我慢（登山等）／移動手段／無抵抗ゾーン（徒歩では500～800m程度）等

◆報告（フォーラム当て2009）・2◆（小池利佳）近代化遺産の観光活用《産業観光》についての一考察

平成19年度より経済産業省が始めた「近代化産業遺産群33選（全国575箇所）」及び平成20年度の「近代化産業遺産群続33選（全国540箇所）」では、国内各地に残る明治～戦前までの建造物、機械、文章などが「近代化産業遺産」として認定された。認定の目的は、近代化産業遺産の価値の顕在化と地域活性化へ役立ることとされている。

こうしたなか、今年の4月から長崎市の軍艦島へ上陸することが許可され（市が見学通路、船着場等を整備）、「軍艦島ツアー」として観光活用が始まっている。

「近代化遺産を活用した地域の活性化」や「近代化遺産の観光活用」が目的とされているが、果たして近代化遺産を使った地域振興とはどのようなものなのであろうか。

[報告目次]

1. 産業観光の概要
2. 海外の産業観光の特徴
 - ・国境を越えた広域連携
 - ・イギリスとドイツの例に見る特徴
3. 日本の産業観光と地域振興（国内事例）
4. 産業観光による地域振興への影響
 - ・海外での影響と課題
 - ・国内での影響と課題

（文責：「当て塾」事務局 野倉 淳）

■2009年6月 計交研・当て塾共催セミナー（第Ⅸ講・第5回）

●日時：平成21年6月10日（水）

17:00～20:00

●場所：計画・交通研究会会議室

●講師・演題

「当て塾」塾長 鈴木忠義 先生

観光原論研究（16）Ⅲ．観光の基礎理論（2）

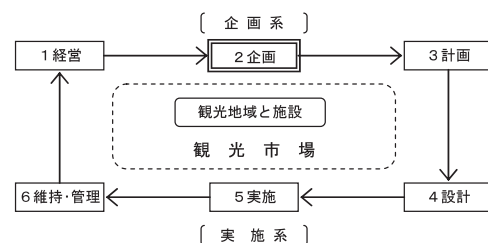
●参加者：14名（うち計交研関係5名）

[講義概要]

◆観光原論研究・16◆（鈴木忠義）

□原論の「まえがき／序」に記述したいこと

観光は、後発の学問である。計画論・手法論は、周辺諸学に学ぶ。下記の事業サークルの中で、「2企画」がすべてと言ってもよい。



この原論は企画することを目指し、それに貢献できる“学”をイメージしている。“学”と

は、その分野の“知的体系化”である。

Ⅲ. 観光の基礎理論 2. 自然の法則

2.1 自然と人間

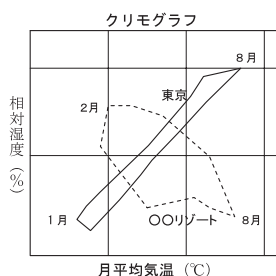
自然と人間の関わりは、用・強・美で表される。その一は用（役立つ）で、機能論である。その二は強で、国土の保全、安心・安全、環境等である。その三は美で、景観である。

(1) その一：機能論＜快感帯への努力＞

機能論は、自然が人間にどのような効用をもつかという効用論とも言え、社会の進歩によって変化する。快感帯へ努力は、機能論（効用論）の一部である。

①温度と湿度

右図は、年間の気温と湿度の関係を示したクリモグラフである。発地（東京）と着地のグラフの違いで、着地の快適性が示される。



②生物から学ぶ

生物は、変化する気候に対応した様々な習性を備えている。渡り、冬眠、冬毛と夏毛などがその例で、人間も学ぶことができる。

③人間は文明力で解決

人間は、建物や冷暖・暖房機器など、文明力で解決している。

2.2 経済・社会の変革により大衆化

イギリスの産業革命により、鉄道網を中心に移動手段が発達し、また、所得と労働時間の余剰が生まれ、近代観光の起源となった。

(1) 保養地

南部のブライトンなど海浜部での静養・療養、アルプス登山、グランドツアーなど、富裕層が国内外に保養地を求めた。

サマー・リゾート（避暑地）

ウィンター・リゾート（避寒地）

(2) 挑戦型へ

ウィンタースポーツは、北欧の自然と風土の中で使われていた実用的手段が、富裕層によつ

てレクリエーション、スポーツとなった。

2.3 大衆化の背景

人間は、本来的に好奇心、探求心を持つ。そこに文明力が加わって、観光の大衆化が進んできた。豪華客船、リゾートホテルなどは、移動や住居の手段である施設が観光旅行の目的となった例である。

動機づけ、好奇心、探求心／移動手段／装備（衣食住）／発表の機会／金持ち、スポンサー／マスコミ……

2.4 自然の観光資源性

自然をどう観光対象化するかが重要である。

(1) 観光以前

自然は、観光以前に、国防・資源・エネルギー等としてみられる。思想的には、学問・探検・調査等の対象である。

(2) 対象化には思想が大切

我が国の国立公園は米国のイエローストーンが原点で、商業的開発をしないよう保護することが第一義である。また、森林の効用は五つあり、生産・産業だけではない。このような自然に対する思想が重要である。

（文責：「当て塾」事務局 野倉 淳）

■2009年7月 計交研・当て塾共催セミナー （第Ⅸ講・第6回）

●日時：平成21年7月8日（水）

17:00～20:00

●場所：計画・交通研究会会議室

●講師・演題

①「当て塾」塾長 鈴木忠義 先生

観光原論研究（17）Ⅲ.観光の基礎理論（3,4）

②（財）日本交通公社 研究員 渡邊智彦 氏
オーストラリアにおける観光人材育成の事例

●参加者：17名（うち計交研関係8名）

〔講義概要〕

◆観光原論研究・17◆（鈴木忠義）

Ⅲ. 観光の基礎理論

○Ⅲの構成 * 「5. 観光者現象」を追加

Ⅲ. 1 観光の命題	Ⅲ. 2 自然の法則	Ⅲ. 3 技術(文明)に 関する理論	Ⅲ. 4 人間・社会・経済 の秩序と法規
Ⅲ. 5 観光者現象			

3. 技術（文明）に関する理論

3.1 移動手段

(1) 目的・行動・形態（個人と集団）とその進化

旅行の目的・行動・形態の進化により、移動手段は地中・海中から宇宙にまで及ぶ。このとき、どこまで接近するかが重要で、近づき過ぎると観光資源を傷付けることがある。

(2) 種類

実用的なものから、遊び、装飾的なものなど、新旧様々な移動手段がある。

徒歩・車椅子・乳母車・かご／自転車／車、バス／軌道／飛行機・宇宙船／船・潜水等

3.2 滞留手段

(1) 目的・行動・形態（個人と集団）

展望台や休憩施設など滞留のための手段があり、移動手段と同様に、目的・行動・形態施設の進化による多様化している。

(2) 単体と複合

例えば、ホテル・旅館では、泊と食が分かれた施設と複合した施設がある。その国の文化も影響し、様々なサービスの幅がある。

3.3 環境（雰囲気）

物理的（人工的）な環境を、技術（文明）の目的的な応用によって生み出している。

4. 人間・社会・経済の秩序と法規

4.1 生理

健康と快適さが追求され、バリアフリーやユニバーサルデザインが求められるが、どの範囲まで対応するかが問題となる。

4.2 心理

観光では、好奇心や自己顕示欲など喜びに関する心理、生きがい感が重要である。

好奇心、探求心/経験/自己顕示/安全/満足

4.3 芸術

古典文学から大衆文学に対応した観光地、演劇の間、音楽のリズム・ハーモニーなど、芸術の構造と観光との関わりが重要である。また、これらを感じるセンスも重要である。

文芸、趣味、美/時間芸術（間）、音楽、演劇

4.4 目的

観光には様々な動機があるが、個人の体力・能力、仲間・集団・家族、時間（余暇）、経済（所得）等の要素で目的が決められる。

◆報告（フォーラム当て2009）・3◆（渡邊智彦） オーストラリアにおける観光人材育成の事例

オーストラリアでは、国内の研究開発の効果と効率性を高めることを目的に、1990年、オーストラリア連邦政府、州政府機関、研究機関、教育機関、民間企業等による研究協力組織「共同研究センター」（Cooperative Research Centers：「CRC」）を設立した。

同組織では、観光産業を含む6分野に関する様々なプロジェクトが行われており、2004年に、観光農園事業に取り組む事業者向けの人材育成テキストを開発して、国内の観光事業者の育成に取り組んでいる。

本報告では、CRC及び人材育成テキストの紹介し、観光資源の捉え方、観光人材育成のあり方等について考察した。

[報告目次]

1. 共同研究センターCRCについて
2. 観光農園事業 評価ツール
(ステージ1テキスト)
3. 観光農園事業 事業促進ワークブック
(ステージ2テキスト)

(文責：「当て塾」事務局 野倉 淳)

■2009年7月 計交研・当て塾共催セミナー (第Ⅸ講・第7回)

●日時：平成21年7月22日（水）
17:00～20:00

●場所：計画・交通研究会会議室

●講師・演題

「当て塾」塾長 鈴木忠義 先生

観光原論研究（18）Ⅲ．観光の基礎理論（訂正と追加）とⅣ．観光の学と術の体系

●参加者：17名（うち計交研関係7名）

[講義概要]

◆観光原論研究・18◆（鈴木忠義）

Ⅲ．観光の基礎理論（訂正と追加）

3.1から4.4に、以下の内容を追加した。

3.1 移動手段 (3) 複合と選択（項目追加）
旅行者は、自分の旅行プランに合わせて交通機関を組み合わせて利用する。

3.2 滞留手段 (3) 選択（項目追加）

どの様に顧客を選択し施設の柔軟性を維持す

るかが、経営者にとって重要課題である。

4.2 心理（内容補足）

好奇心・探求心は“やる気”の原動力。

自己顕示欲に対応して、最優価値、初めて、一番、only-oneが求められる。

4.4 目的（内容補足）

貴重な資源については、本物は保存し、模倣品・代替品を見せることも必要である。

4.5 法規

資料：「観光実務必携2009」

（ぎょうせい、2009.7）

観光庁監修／観光実務研究会編集 等

5. 観光者現象

観光者の主要な現象の捉え方を示す。個別プロジェクトでは高い精度が求められる。

5.1 集中発生（変動）

来訪者の変動は、年間稼働率（u）と変動係数（v）の関係（u-v曲線）で示される。

要因：季節、月、曜日、時刻、天候、人為的 等

5.2 誘致圏

観光者の誘致圏の把握は重要である。

誘致率、誘致圏人口／競合圏／補完圏

5.3 基本距離と行動圏

出発地から観光地までを基本距離、回遊の範囲を行動圏、全体をラケット構造と呼ぶ。

基本距離が延びればラケットが大きくなり、行動圏も広がる。繰り返し訪れるのは馴染みの場所となり、リゾートとなる。

5.4 満足度（目的）

アンケート調査などにより、個人の満足度を調査する。個人の感動は以下の基本式で示され、資質・経験によるところが大きい。

〔基本式〕＊詳細は「I 観光の概念 1.4」を参照

$$\text{感動 (i)} = \text{動機づけ} \times \text{観光対象 (mO)} \\ + \text{準備} \times \text{条件 (pC)} + \text{蓄積 (s)}$$

＊「観光対象」をRからO (Object) に変更した。

5.5 効用

観光の効用は、観光者の満足、観光地の経済効果、文化的効果等である。

1日の観光有効時間（8時間）と興味が持てた時間iから、 $\sum i/8$ を密度価値と呼ぶ。また、複数の対象があれば $\sum (\bigcirc\triangle\square\cdots) / 8$ を変化価値と呼ぶ。この密度価値・変化価値により、効用

を測定することができる。

IV. 観光の学と術の体系

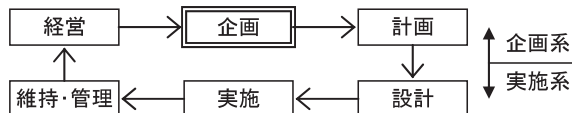
1. 観光の学と術の考え方

「学」とはその分野の“知的体系”であり、「術」とは、“現場施策の技”である。

原 論	戦略論	戦術論	周辺諸学
I. 観光の概 II. 観光の意味論 III. 観光の基礎理論 IV. 観光の学と術の体系	〔企画系〕 1. 企画・計画 2. 手段の選択 と手順	〔実施系〕 1. 設計 2. 実施 3. 維持・管理	十進分類表 (IV. 3) *観光学が未完 であるから
観光各論 調査－分析－評価－総合－合意			

2. 各論の構成

各論の構成は、下図のサークルに対応する。



3. 観光の学と術の体系（十進分類表）

以下の大分類とそれぞれの中分類（100項目）で、基本的な学と術の体系を示す。

1. 観光原論(10～19)	6. 観光手段施設(60～69)
2. 観光理論(20～29)	7. 観光政策(70～79)
3. 観光開発(手法)(30～39)	8. 観光経済(80～89)
4. 観光開発各論(40～49)	9. 観光経営(90～99)
5. 観光対象と活動(50～59)	0. 総記(00～09)

4. 入門への道

日本の旅人、世界の旅人、参考文献

（文責：「当て塾」事務局 野倉 淳）

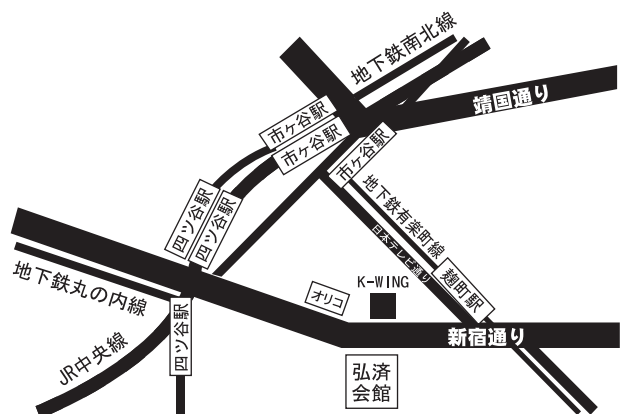
■一般社団法人化の手続き状況

さる6月24日に、麹町公証役場で定款認証を受け、翌25日に東京法務局にて設立登記を終えました。現在の、任意団体としての当研究会の事業活動を、8月末に一般社団法人に移行するべく事務処理を進めております。

計画・交通研究会

会長	森地 茂
副会長	石田 東生
副会長	家田 仁
副会長	屋井 鉄夫
事務局長	水野 高信
会報編集委員長	中井 祐

〒102-0083
 東京都千代田区麹町5-2-1 K-WING 6F
 TEL=03-3265-1774
 FAX=03-3221-5489
 E-Mail=
jimukyoku@keikaku-kotsu.org
 Homepage =
<http://www.keikaku-kotsu.org/>



計画・交通研究会案内図

交通

JR中央線四谷駅麹町口から徒歩6分/地下鉄丸の内線四谷駅徒歩6分/南北線四谷駅徒歩7分/有楽町線麹町駅4番出口より4分
 弘済会館前の大きなビル（オリコ）の右隣、1階にドラッグストア（クスリ）の入った小さなビル。